

大正期における石川県の氷室（雪室）と鮮魚鉄道輸送

竹 井 巖 *

“Himuro (snow cellar)” and fresh fish transport
by rail in the Taisho period in Ishikawa

Iwao Takei *

Received October 31, 2008

Abstract

With Ishikawa statistics books, a state of fresh fish transport by rail in Ishikawa in the Taisho period was examined. In 1907, fresh fish transport by rail from Noto to Osaka was tried. After the end of the Meiji era, railroads were used for the fresh fish transportation well in Ishikawa. A “Himuro (snow-cellar)” trace at Katayamazu-cho in Kaga-city was investigated. A survey map of the trace was shown. Stored snow of this snow cellar was used as coolant for the fresh fish transportation by rail from Katayamazu to Osaka in the Taisho period.

キーワード

氷室，雪室，貯蔵雪氷，鮮魚輸送，石川県統計書

1. はじめに

石川県における雪氷利用の歴史では、古くは江戸時代の元禄6年（1693）に金沢城の玉泉院丸に氷室が設けられて、冬期の雪氷を貯蔵し夏期の六月朔日の氷室の日に儀式用の氷として用いられていたことが知られている^{1,2)}。それ以前については、犀川上流の倉谷から6月朔日の祝いの氷として献上されていたことが伝えられているが、前田利家の金沢入城時期（1584）まで遡るとされる^{1,3)}。このように記録に残る範囲では、江戸時代の金沢城における儀式用の雪氷利用がまず確認される。一般的な雪氷利用の記録はかなり時代が下ったの話となる。近江町市場にあったとされる藩の御用で鳥魚を貯蔵していた穴蔵の存在が文献¹⁾にみられるが、この穴蔵には冷蔵用の雪氷利用がされていた可能性が指摘されている⁴⁾。アーネストサトウが金

* 教育能力開発センター
Center of Development for Education

沢に立ち寄った明治維新前夜には、夏場の茶屋の接待の飲食用に利用されていたことが確認できる⁵⁾。

明治に入ると、貯蔵雪氷を扱う業者の存在が明治20年以降の石川県統計書に記載されるようになる⁶⁾。これらの貯蔵雪氷を扱う業者は昭和30年前後まで存続したとされる⁷⁻⁹⁾。その後貯蔵雪の利用は、人造製氷技術の発展や冷蔵庫の普及で消失してしまう。明治期以降大正期までの間の雪氷利用の実態は、その解明がまだ不十分であるが、氷室の日の祝い用（儀式、縁起物）、飲食用、医療用（熱冷まし）、鮮魚冷蔵用に利用されていたことが伝えられている^{3,7-9)}。

特に、鮮魚冷蔵用の雪氷利用は大正期以降の石川県における氷室の貯蔵雪の大規模利用の主体をなしていたとされる^{7,9)}。これは、明治後半以降の交通の近代化による物資輸送の増加、明治末期に本格的に稼働し始めた機械式製氷会社の存在、衛生行政による飲食用雪氷の事実上の禁止などから、鮮魚などの冷蔵用途に雪氷利用が徐々に絞られていったことを示唆している。石川県統計書に記載された大正末期からの機械式製氷会社による人造氷の産出量は急激な伸びを示すのに対し、貯蔵雪氷の産出量は大正末期をピークとして昭和期に入ると業者数の激減とともに統計書上に記載されなくなる⁹⁾。

本小論では、大正期の石川県の氷室の貯蔵雪氷と、鉄道による鮮魚輸送との関係を論ずることを企図した。そのためにもまず、鮮魚鉄道輸送に関連していたとされる加賀市片山津町に現存している大正昭和期に利用された氷室跡の調査結果を示す。

2. 加賀市片山津町の氷室

(片山津氷室跡の調査)

中谷宇吉郎雪の科学館が2002-2006年の期間に実施した氷室調査における情報提供の呼び掛けに対して、加賀市片山津町の山林に氷室跡があるという情報が寄せられた。この氷室について、中谷宇吉郎雪の科学館の神田健三館長と北陸大学の竹井が、2006年および2007年に現地調査をおこなった。氷室の場所は、図1(a)で示したように片山津温泉の旧鉄道駅であった現在のバスセンターから山林に入って竹野坂とよばれる北東向きの谷筋にある（北緯36度20分33秒，東経136度21分55秒）。氷室跡の現況は両側に斜面がせまる幅15mの谷間に、10m×7mの四角形で深さ1mほどのくぼ地になっている（写真1）。氷室として使用していたころは4～5mの深さがあったが、危険なので廃材等で埋め立てられたという。

規模と形状を調べる目的で簡単な測量を行った。測量図（図1(b)）から判明することは、谷筋に堤を設けて掘り下げた四角形の穴であったこと、氷室のそばを道が通っており、その道に近い方の堤が掘り下げられていて、出入り口として利用されていたことが判明した。道側の形状は廃材を搬入した時に崩れたためか、形状が明確ではなくなっている。このような谷筋に設けられた氷室の例は、金沢市月浦町の氷室⁹⁾があり、堤側の一部を切り割いて出入り口にし道に接続していることなど、よく似た形態であることが認められた。氷室跡の上流側にはなだらかな細長い谷筋の平地が続いており、この平地に積もった雪を氷室に落とし込んで詰めたものと考えられる。

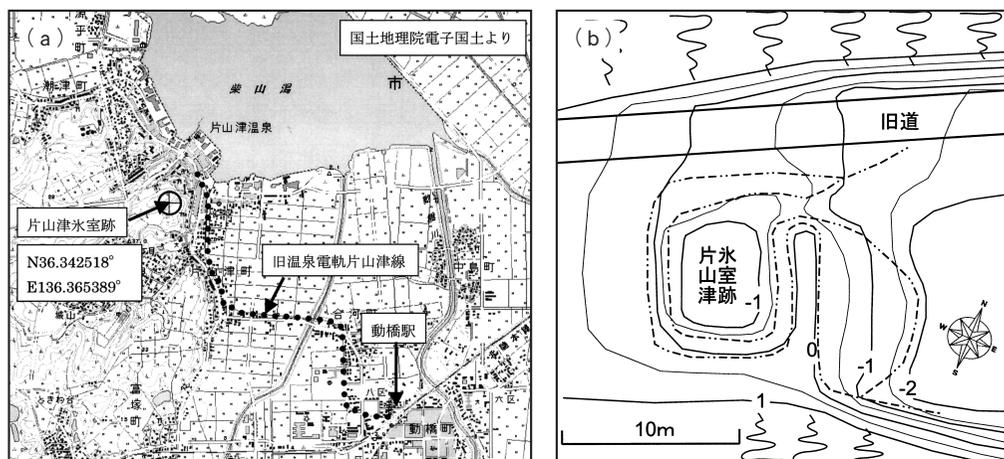


図1 加賀市片山津町の氷室（雪穴）の（a）位置図と（b）簡易測量図。片山津温泉バスセンター（旧温泉電軌片山津線の片山津駅）から山林に入った場所にある。氷室は7 m×10mの規模。谷下側に堤を設けて作られ、旧道側の堤が掘り下げられている。現況は深さ1 mの窪地となっている。



写真1 片山津町の氷室（雪穴）跡の現況。穴は廃材等で埋められ、深さ1 m程度の窪地になっている。

（所有者への聞き取り調査）

所有者は片山津で大正時代から営んでいた魚店（坂口魚店）の方で、2代目の奥さん（80歳代）と3代目である息子さんに話を伺った（2007年1月）。残念ながら氷室（雪穴と呼んでいたという）の運用に直接携わった方ではなかったため、正確な使用時期や運用の実態等の詳細は得られなかった。使用時期は概ね大正時代から昭和初期にかけての期間であると推測された。貯蔵雪水の用途は、鮮魚の冷蔵用である。このことに関しては、金沢市月浦町氷室の貯蔵雪が金沢市の近江町市場の鮮魚用冷蔵材として利用されたことと同様である。しか

し、さらに話を伺うと、近隣の外海に面した橋立港から安宅、今江潟、柴山潟を介して自前の船で鮮魚を運搬して片山津に陸揚げした後、鉄道で動橋駅まで搬送し、さらに大阪方面に鮮魚を送ったという。このとき、鮮魚の長距離輸送に冷蔵材として氷室の雪を用いたとのことである。残念ながら正確な輸送の期間も当事者ではないため不明とのことである。戦後の昭和20年代にはすでに利用していなかったという。

鉄道を利用した鮮魚輸送については、5 - 6月のアジを雪山の貯蔵雪を用いて富山県黒部から大阪方面に大正昭和期（大正13年から昭和14年）に送っていた例が報告されている¹⁰⁾。片山津町の氷室は、その貯蔵雪がこのような鮮魚長距離輸送の際の冷蔵材としての利用に供された実例のひとつとして位置づけられる。

3. 石川県統計書⁶⁾ からみた大正期の鮮魚鉄道輸送

明治31年に敦賀から金沢まで官営鉄道がつながり、津幡から七尾まで私設鉄道が設置された(図2)。それまでは、陸路を徒歩で移動するか海路の定期航路を利用するしかなかった地域が、鉄道により一気に近代化の波に洗われるようになる。各種学校の設立や軍隊の設置などもあって、人や物の流れが鉄道によって盛んになる。明治40年以降、石川県では七尾 - 津幡間が官営鉄道になったこともあり、鉄道による物資輸送が石川県統計書に記載されるようになる。石川県統計書における鮮魚輸送の実態を明治末期から大正期について示すと表1のようになる。

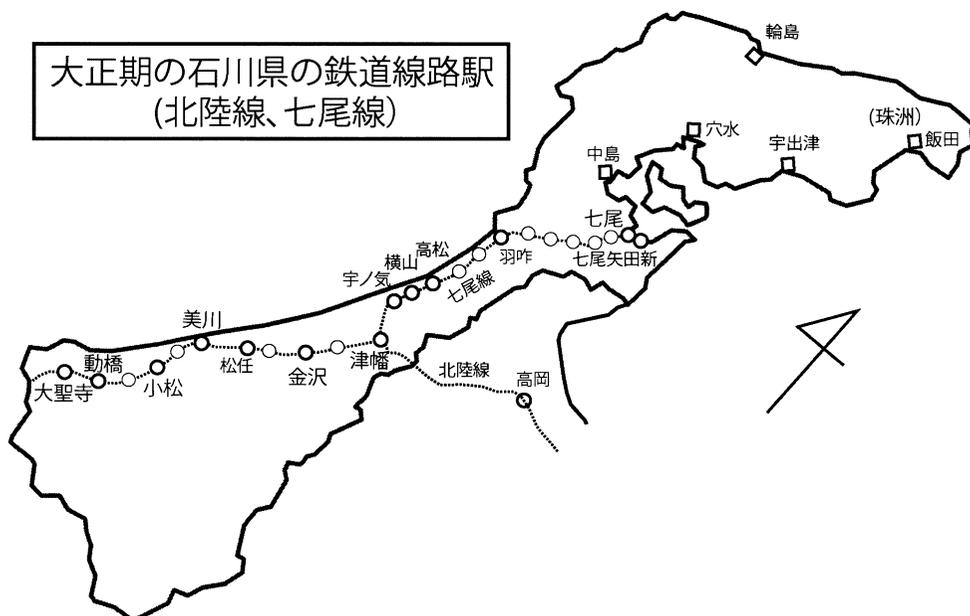


図2 石川県の鉄道と駅の位置図。明治31年（1898）に関西方面から金沢まで鉄道がつながり、翌年富山まで接続する。七尾線は明治31年津幡 - 七尾間が私設鉄道として開設され、明治33年に北陸線と接続する。さらに七尾線は明治40年（1907）に国に買い上げられて官営鉄道となる。

表1(1) 鉄道積出（上段）および到着（下段）貨物（生鮮魚、トン、石川県統計書より）

	：消費地														：供給発源地												
	大聖寺	助橋	栗津	小松	寺井	美川	松任	野々市	金沢	森本	津幡	倶利伽羅	本津幡	字ノ気	横山	高松	宝達	敷波	羽咋	千路	金丸	能登部	良川	徳田	七尾	矢田新 七尾港	総量
明治40年	163	-	-	39	*	-	-	*	165	*	131	*	-	438	256	218	6	21	288	-	-	-	-	-	1803	1992	5,520
明治41年	-	-	-	-	*	-	-	*	1630	*	-	*	24	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1,654
明治42年	180	-	3	62	*	139	-	*	291	*	419	*	1	49	97	117	43	9	485	11	-	-	-	3130	672	5,708	
明治43年	25	-	20	272	*	81	61	*	2060	*	42	*	19	1	-	11	3	6	15	1	4	4	-	36	-	2,661	
明治44年	401	-	3	99	*	122	-	*	469	*	429	*	10	122	217	140	18	6	486	8	-	-	-	3039	1276	6,845	
明治45年	7	14	11	293	*	79	53	*	2588	*	73	*	24	17	-	8	11	7	20	-	9	9	1	34	-	3,258	
明治46年	805	-	-	232	*	142	-	*	528	*	519	*	-	140	207	171	-	-	665	-	-	-	-	3061	1940	8,410	
明治47年	-	-	-	313	*	128	100	*	3443	*	-	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3,984	
明治48年	233	-	1	147	*	300	16	*	5428	-	267	*	-	164	120	142	30	5	584	3	-	-	-	1715	95	9,250	
明治49年	4	11	28	332	*	104	80	*	2769	-	51	*	29	6	-	21	11	10	7	3	16	4	2	14	-	3,502	
明治50年	551	-	15	405	*	255	14	-	919	-	531	*	2	350	239	187	44	-	632	10	-	-	-	2374	1197	7,725	
明治51年	64	14	23	604	*	79	126	-	3291	-	57	*	17	12	14	9	17	-	14	10	5	-	8	30	-	4,394	
明治52年	625	10	8	232	23	188	24	-	1668	-	1062	*	10	388	198	100	58	3	790	5	-	-	-	3373	1580	10,345	
明治53年	92	30	24	408	2	120	164	2	4098	-	120	*	26	19	9	6	15	14	24	17	12	3	1	25	-	5,231	
明治54年	794	-	-	386	-	143	-	-	1124	-	1092	*	4	562	207	96	52	2	551	3	4	1	-	-	2526	705	8,252
明治55年	98	20	-	366	-	107	115	-	3647	-	127	*	20	15	18	9	-	6	-	8	4	2	1	-	-	4,563	
明治56年	601	12	1	344	25	96	7	-	1482	4	1079	-	1	666	284	188	148	13	1067	6	2	1	-	2720	888	9,635	
明治57年	84	25	26	378	1	73	121	3	3814	-	188	-	18	-	-	3	-	7	1	10	2	1	1	42	-	4,798	
明治58年	483	95	3	248	17	190	13	-	1687	1	866	-	2	1000	414	267	91	8	759	9	3	-	-	4093	1877	12,126	
明治59年	134	39	28	424	3	108	119	4	4190	-	201	2	12	13	13	-	10	9	19	19	16	4	2	32	-	5,401	
明治60年	286	25	4	162	15	188	7	-	1487	-	298	-	2	893	278	217	79	3	763	7	2	-	-	2913	1055	8,684	
明治61年	128	46	37	230	2	56	106	2	3284	-	249	2	38	17	15	11	12	10	15	5	12	3	1	4	-	4,285	

※明治43年以降金沢で製氷工場が稼働し始める

表1(2) 鉄道積出(上段)および到着(下段)貨物(生鮮魚, トン, 石川県統計書より)

	：消費地														：供給発源地												
	大聖寺	動橋	栗津	小松	寺井	美川	松任	野々市	金沢	森本	津幡	倶利伽羅	本津幡	字ノ気	横山	高松	宝達	敷波	羽咋	千路	金丸	能登郡	良川	徳田	七尾	矢田新 七尾港	総量
大正7年	278	147	-	472	41	623	81	-	2166	-	572	-	3	392	288	303	30	4	1066	10	-	-	-	-	3529	3522	13,527
大正8年	164	72	43	527	6	434	94	2	4034	-	231	5	40	19	5	6	13	10	36	12	17	9	9	-	12	2	5,802
大正9年	172	419	1	494	6	502	11	4	2013	-	464	-	-	1007	278	311	19	5	798	3	-	-	-	-	4370	4180	15,057
大正10年	232	63	48	728	3	456	18	18	5181	-	143	3	46	31	4	30	7	30	69	24	-	7	13	2	12	34	7,202
大正11年	171	224	1	1568	20	580	10	-	2271	-	329	-	-	889	463	489	85	1	1106	5	-	-	-	-	4807	4130	17,149
大正12年	254	57	48	799	6	607	85	8	6233	-	134	3	46	37	16	33	7	22	95	21	18	9	7	1	40	35	8,621
大正13年	214	78	-	750	37	560	10	-	2517	-	356	-	-	1178	434	686	65	4	2953	-	-	2	-	-	4353	7024	21,221
大正14年	327	67	53	1122	71	669	303	4	6960	-	143	3	25	45	10	22	8	16	61	13	13	10	8	2	55	30	10,040
昭和1年	152	216	-	637	14	350	10	-	2108	1	108	-	-	395	1036	408	51	9	74	24	-	-	-	-	3511	3927	13,031
昭和2年	269	158	39	1066	25	667	202	1	7254	-	147	5	40	194	9	36	3	18	1976	13	14	11	11	1	27	39	12,225
昭和3年	618	486	91	1752	65	425	12	-	2386	-	350	-	-	503	269	467	53	9	1042	9	11	1	-	-	4068	3341	15,958
昭和4年	326	27	33	1038	18	687	211	2	7742	-	127	4	38	201	34	36	19	44	194	13	17	10	12	3	212	49	11,097
昭和5年	112	181	99	543	14	455	2	-	2353	-	305	-	-	494	111	315	38	11	1159	30	4	-	-	-	4079	4041	14,346
昭和6年	359	17	23	1240	47	783	252	-	8275	-	231	6	32	145	49	64	46	54	250	45	25	9	8	1	43	282	12,286
昭和7年	280	205	68	763	72	1008	14	-	2855	-	397	-	-	1208	403	367	40	27	987	2	1	-	-	-	3557	5910	18,164
昭和8年	397	165	3	1096	29	500	220	-	8696	-	148	6	38	150	29	74	27	41	209	11	28	5	2	3	73	32	11,982
昭和9年	265	331	112	1027	133	398	38	-	2433	-	293	-	-	580	231	226	63	30	966	23	-	-	-	-	3972	5746	16,867
昭和10年	495	45	34	1071	86	792	274	-	9819	1	118	10	24	111	46	84	30	63	227	30	18	2	-	-	83	38	13,501
昭和11年	343	477	204	825	217	722	18	-	1830	-	351	1	-	135	447	315	110	49	1113	4	10	-	-	-	3496	3744	14,411
昭和12年	484	24	10	1001	131	571	230	-	7821	17	77	12	47	29	15	124	50	34	166	8	29	9	9	1	558	139	11,596
昭和13年	210	267	131	706	159	716	112	-	3108	2	102	8	1	289	344	327	163	108	1025	34	2	-	78	-	3294	6964	18,150
昭和14年	430	45	23	879	150	628	192	-	8938	3	112	10	48	69	25	69	25	48	106	4	13	4	5	1	112	27	11,966

※大正13年以降に設置された加賀笠間等の駅のデータは省略してある

※大正13年以降に設置された加賀笠間等の駅のデータは省略してある

※羽咋の大正11年の値は誤植と思われる

この表から窺えることは、鉄道駅における鮮魚の取り扱い量を見た場合に、各駅が大きく次の3種類に分類できることである。すなわち①鮮魚積出量が優勢な駅、②鮮魚到着量が優勢な駅、③鮮魚積出量と到着量がいずれも多く、拮抗または変転する駅の3種類である。①に相当する駅は、能登地区の七尾、七尾矢田新町や河北郡の海岸線にある羽咋、高松、横山、宇ノ気の各駅である。鮮魚の供給駅と言える。②は、松任や本津幡などの海岸線から離れた地域の駅である。魚の消費地と言える。③に分類される駅は、金沢、小松、大聖寺のような古くからの都市および美川、津幡のような物資集散の機能を持った駅である。

①に分類される駅は、鮮魚の供給発送地として、本小論における貯蔵雪氷の利用の可能性の高い駅で、周辺に氷室が設けられていたか冷蔵用の氷の調達容易な場所であったと思われる。②に分類される駅は、純粋に魚の消費地と言えそうである。③に分類される駅については、鮮魚の消費地であるとともに供給発送地でもある性格を持っている。たとえば金沢は魚の大消費地であるが、少なからぬ鮮魚の積出地でもある。金沢に夏場に大量の氷室の貯蔵雪氷が運び込まれ利用されていたこと^{7,9)}に関係するものと考えられる。ところで、大聖寺は明治末期には鮮魚の供給発送駅の性格が強いが、大正期後半は消費地駅的な性格が強くなる。一方、小松は金沢と同様に基本的に消費地であるが、少なからぬ鮮魚積出機能も持った駅になっている。物資集散地と考えられる美川と津幡は積出量と到着量が拮抗している。美川は海岸そばの港町でもあるので鮮魚の供給発送駅であることや、手取川の河口に位置しているので水運による物資集散機能を果たしている駅の性格によるのであろう。しかし、津幡は海岸線から離れた場所にあり、北陸線と七尾線の分岐点であるとはいえ、鮮魚積出量の意外な多さが目立つ駅である。

大正期の官営鉄道の充実ぶりは、駅が次から次へと新設されることから窺えるが、さらに加賀地区と金沢地区において私設鉄道の設置も進められたのがこの時代である。加賀地区では大正2年に温泉電軌株式会社が設立され、大聖寺－山中、河南－粟津温泉、宇和野－動橋など軌道が設置されていく。片山津と官営動橋駅が接続されたのは、大正3年のことである⁶⁾。

4. 考 察

明治末期から大正期は、石川県の物資輸送が海路による長距離輸送の時代から、整備が進む鉄道を用いた長距離陸路輸送へと変わろうとしていた時代と考えることができる。前節の魚の鉄道輸送の統計は、この時代を反映して年々その積出貨物と到着貨物の総量が増加していく様子を明確に示している。鮮魚の積出量と到着量の総量の差は、石川県が鮮魚の県外輸出県であることを示しており、この差は長距離鮮魚輸送の一端（県外からの輸入もあるので）を反映している。長距離輸送には、冷蔵材を利用することの必要性を現代人の私たちは常識として思う。しかし、上述の統計量は年毎の集計に過ぎず、鮮魚の季節的な取り扱い量は不明である。鮮魚の長距離輸送の増加することが、貯蔵雪氷が長距離輸送に利用されたことを意味するかどうかは、必ずしも明確ではないのである。このことを詳細に検証するためには、利用できる冷蔵材としての貯蔵雪氷（もしくは人造氷）を供給する体制の状況と、夏場（7～9月）の鮮魚を輸送する需要供給の実態が明確にされる必要がある。

① 能登地域の鮮魚鉄道輸送について

「明治39年度明治40年度石川県水産試験場業務報告（氷蔵魚運搬試験）」という文書が珠洲市史（昭和54年）に載録されている¹¹⁾。「本試験ハ農商務水産局ノ指定ニ基キ七、八、九ノ三箇月間」奥能登¹²⁾と大阪の間の生魚の「輸送販売ノ試験」を行ったという内容である。「貯蔵氷雪」または「人造氷」の利用上の問題点と、奥能登地域からの船便と鉄道を介して大阪に搬送する場合の実情が言及されている。この時点ですでに、冬季と春季の魚を奥能登から需要地の京阪地方へ鉄道を用いて搬送していたという。ここでは、七尾港に搬送陸揚げし隣接する七尾矢田新駅から鉄道便で大阪に搬送され売り買いに供せられるまでの所要時間は、「少クトモ三日間」を要するとある。報告書では、「貯蔵氷雪」または「人造氷」の利用基盤の整備や「生魚運搬車ヲ鉄道ニ設備」することの必要性に言及し、この時点での貯蔵氷雪を用いた生魚運搬は、経済的な問題や取り扱い方の改善を要するが、期待できるとの結論になっている。もちろん、このような試験が行われた背景には、能登地方を中心とする海域が良漁場であるにも関わらず、鮮魚を長距離運搬することが難しいので、能登地域の漁業者の漁活動が夏場には低調になっているという現実があった¹¹⁾。

七尾矢田新駅および七尾駅からの鮮魚の積出量の変遷を表から見ると、明治40年の時点ですでに合計4000トン程度になっている。この積出量は、大正7年あたりから2から3倍程度に増えている。大正時代の後半から、なにか特段の事情が生じたものと考えられる。大正6年より七尾鹿島地区の水雪営業者（貯蔵）が0から6業者に増えたこと⁹⁾と関係するのかもしれない。なお、七尾に製氷工場が稼働し始めるのは大正12年からであるが、その前後で鮮魚積出量に大きな変化は認められない。

② 片山津氷室の位置づけと大聖寺（加賀市）周辺の氷室

加賀市片山津町の氷室についての調査から判明したことは、外海の橋立港から安宅、今江潟、柴山潟の内水面を介して片山津に陸揚げされた鮮魚が貯蔵雪を供給され、さらに鉄道を用いて関西方面へ長距離輸送されていたことである（図3参照）。動橋駅の鮮魚の積出量と到着量を見ると、大正6年以前には扱量は多くないが、大正7年以降に扱量が急に増え積出量が多い鮮魚の発送地になっていく。大正3年に開設された動橋片山津間の私設鉄道もこの鮮魚輸送に一役買ったことはすでに述べた。海岸隣接地ではない動橋駅に集荷される鮮魚は、今江潟や柴山潟と河川等の水路による船便輸送も一定の役割を果たしていたものと考えられる。動橋駅に近接する氷室跡は、図3の打越地区（平野部の少し高い平地）に2基あったことが新潟大学の和泉教授の聞き取り調査で判明している。これらの氷室は1基が組合の所有で、もう1基が魚屋の所有であったという。用途は料亭（仕出屋）への納入と鮮魚の冷蔵用途であった。片山津の氷室と同様に、これらの氷室の貯蔵雪も鮮魚長距離輸送の冷蔵材用途に使用されていた可能性がある。

現在の加賀市域（旧江沼郡）は、大聖寺藩の行政庁があった大聖寺を中心とした地域で、金沢周辺部と並んで石川県内では明治大正昭和期を通じて氷室（雪室）の多く営まれた地域である⁹⁾。大聖寺は関西との距離が、七尾に比べればはるかに近く鮮魚輸送に有利な場所で、さらに大聖寺川の水路を介して塩屋漁港に通じている。この地理的条件は、大聖寺駅からの鉄道鮮魚輸送が、明治末期から大正期にかけて早い時期に数百トン規模で行われてきたことを説明している。大聖寺江沼郡地域の氷雪営業者数が明治34年に100業者を超える盛況を示



図3 大正時代の片山津周辺の地図（石川県統計書大正3年の地図に加筆）。参考のために大正昭和期に営まれた氷室の分布の様子を示した（中谷宇吉郎雪の科学館との共同調査で判明した氷室（雪穴）の一部。打越地区の雪穴については、新潟大学の和泉薫教授の調査結果）。

していること⁹⁾は、鉄道開通時の早い時期の鮮魚鉄道輸送を示唆している。ところで、大正8年以降には、鮮魚の到着量が増加し優勢になり、消費地駅としての性格も強まる。また、この大聖寺駅で積み降しされたと思われる（福井方面からの）江沼郡への氷の輸入が、毎年50トン規模で大正10年まで石川県統計書（産業、県外輸入（工産品））として記載されている。このことは、明治45年（大正元年）に金沢衛戍病院山代分院が設立されたり、大正2年以降に山中温泉、山代温泉、粟津温泉、片山津温泉を結ぶ私設鉄道が施設されたりすることにより、人や物資の移動が活発になっていく様子を物語っていると考えられる。

③ 石川県の各地の鮮魚鉄道輸送から窺えること

石川県全体の鮮魚の鉄道積出量と到着量の差が、石川県における県外輸出（鮮魚長距離輸送量）の規模を測る目安となると考えられるが、対象とする期間全体を通して2000トンから11000トンの間を大きく変動していて、明確な傾向は窺えない（表1）。長距離輸送（京阪地区）と短距離輸送（福井、富山）の区別が必ずしも明確でないことと、漁獲量の年変動も関係していると思われる。ただ、大正10年における石川県の積出量と到着量の差が11000トンを示していることは特筆に値する。大正9年は製氷工場が2カ所（金沢、小松）で稼働を始

石川県の鮮魚鉄道扱ひ量と雪氷供給量(トン、石川県統計書より)

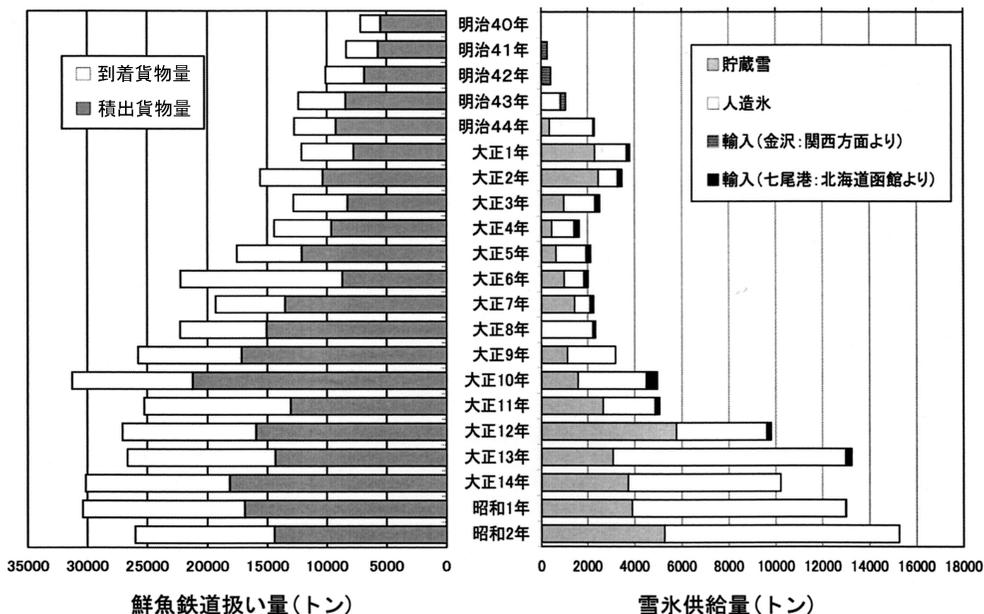


図4 石川県の明治期(明治40年から昭和2年)の鮮魚鉄道取り扱ひ総量(トン、積出と到着貨物量)と雪氷の供給量(トン、貯蔵雪氷、人造氷、県外輸入氷)。石川県統計書よりデータ収集整理して作図。

め、大正12年に5カ所(七尾も加わる)で製氷工場が稼働し、この大正期後半は貯蔵雪氷も含めて氷の供給量が増えていく時期である⁹⁾。図4では、大正期の石川県における鮮魚鉄道取り扱ひ量と雪氷の供給量の変遷を示した。鮮魚の取り扱ひ量の増加基調に対して、貯蔵雪氷や人造氷の供給量も増加していることがわかる。ただ、年毎の鮮魚取り扱ひ量の変動と雪氷の供給量には大きな相関は認められない。

(津幡駅の場合)

津幡駅は富山県と石川県の県境に位置し、金沢から富山を結ぶ線路と七尾につながる線路が分岐する場所である。どちらかといえば山に近い内陸部であるが、鮮魚の積出量が多い場所である。鉄道の分岐点であることで、物資の集散場所の役割を果たしていたと考えられる。さらに、石川県では大正期の氷室の設置数でいえば、津幡が行政的に中心的役割を果たしていた河北郡において氷雪貯蔵業者が50を数えるほどの氷室の多い地域である⁹⁾。津幡に関しては河北潟の内水面物資輸送が可能な場所であり、また津端川や水路を用いた船輸送が可能なので鮮魚の集散地として富山方面や大阪方面への鮮魚輸送に氷室の貯蔵雪氷が利用できる有利な場所であったことが積出量に反映されているものと考えられる。

(高松駅の場合)

高松駅は、宇ノ気や横山駅と並んで海岸線に近い駅で、鮮魚の積出量の多い駅である。地元の方の情報では、昭和初期(小学生のころ)氷室が2ヶ所砂丘に設けられていたことを記憶されていて、その話からは1つは旅館が所有し、もう一つは漁師さんが所有してい

たという。現地調査を行ったが、確認できず場所や規模、用途などの詳細は不明である。高松駅からも氷室の貯蔵雪を利用した鮮魚鉄道輸送が行われていた可能性がある。

(七尾駅と小松駅、金沢駅の場合)

七尾駅と七尾港に設置された七尾矢田新駅は、積出量が圧倒的に多い鮮魚積出駅である。七尾港には明治41年以降には既に北海道函館から氷が百トン規模で輸入されており、これらの氷の一部はさらに奥能登の飯田、宇出津や穴水、中島等に再輸出されている⁹⁾。この天然氷は貯蔵雪の相場に比べると高価なので、はたして鮮魚輸送の冷蔵材として用いられたかどうかは疑問であるが、水産試験場の報告書¹¹⁾にある貯蔵雪の利用と同様に早くから鮮魚冷蔵と輸送に利用されていた可能性は否定できない。それに対して、小松駅は、金沢駅や大聖寺駅と同様に積出量と到着量がいずれも多く、鮮魚に関しては供給駅と消費地駅の両面を有する駅となっている。小松は安宅港から今江潟や梯川の水運を利用すれば魚の運搬が容易なので鮮魚輸送の供給駅になり得たものと考えられる。小松や七尾にも大正後期に製氷工場が稼働することになるが、鮮魚輸送の冷蔵材としての需要がこれらの製氷工場の設置の重要な要素となったものと考えられる。

金沢は鮮魚の集荷地としての江戸時代からの歴史を持ち、それは消費地としての顔をもつが、また一方で多方面への送り出しを行う典型的な集散地としての役割を果たしてきた。明治43年以降の製氷工場の稼働や市域周辺の巨大な氷室の運営などは、鉄道による関西方面への鮮魚輸送を容易に実現できたものと考えられる。金沢については、大正期の金沢市統計書¹³⁾に金沢駅の発送・到着鮮魚量が月別に記載されている。大正初期の7、8、9月の鮮魚発送量は少ないが、大正末期には多くなっている。このことは、図4で示した石川県の雪氷供給量と良い相関を示している。

5. まとめ

本小論では、大正昭和期の鮮魚長距離輸送に利用されたという片山津の氷室跡について調査した結果を示した。また、この氷室の利用された時代背景を探るために、大正期を中心として石川県統計書に記載された鮮魚の鉄道各駅における積出量と到着量の様子を探取整理して示した。このことから、石川県における大正期の貯蔵雪氷および人工氷の利用の一端を窺うことができる。統計資料や関連資料の採取に依存する研究であるため、不備や欠落部分があってもまだ十分な事実把握ができていないのが実情である。ここでは現時点での収集データを示すことが、本小論のひとつの目的となっている。さらに資料の収集を行い、石川県の過去の雪氷利用の実態に迫りたい。

謝 辞

加賀市周辺の氷室分布調査と片山津の氷室跡調査は、中谷宇吉郎雪の科学館の神田健三館長と北陸大学の竹井との共同で行われました。成果の一部を使用させていただいたことを神田館長に感謝します。また、新潟大学の和泉薫教授には打越地区の氷室調査の結果を教えてくださいました。記して感謝いたします。

この研究は、2007（平成19）年度および2008（平成20）年度の北陸大学特別研究助成金の交付による研究であり、経費の一部が用いられた。

参考文献

- 1) 森田平次, 「金沢古蹟志」日置謙校訂, 歴史図書社, 昭和51年, 巻四 p.222-224.
- 2) 「改作所舊記(上)」石川県図書館協会, 昭和14年, p.48-49, p.207-208, p.282-283, p.303-304, p.307.
- 3) 竹井巖, 「金沢の氷室と雪氷利用」, 北陸大学紀要, 第28号, 49-62 (2004).
- 4) 金沢近江町市場史編集委員会編集「金沢近江町市場史」近江町市場商店振興組合, (1979).
- 5) アーネスト・サトウ, 岩波文庫「一外交官の見た明治維新(下)」坂田精一訳, 岩波書店, 第31刷 (1985).
- 6) 石川県統計書, 石川県立図書館に明治13年以降の冊子が所蔵されている。国会図書館の電子図書ライブラリはインターネットで利用でき, 明治期および大正6年までの石川県統計書が閲覧できる。
- 7) 北島俊郎, 「金沢の氷室」, 加越民俗研究, vol.11, 72-81 (1982).
- 8) 池上佳芳里, 「北陸地方における雪室の分布とその盛衰」, 地理科学, vol.54 (2), 126-137 (1999).
- 9) 竹井巖, 「石川県における明治大正期の氷室と雪氷利用」, 北陸大学紀要, 第30号, 107-120 (2006).
- 10) 長井真隆, 「黒部市金谷の雪山について」, 富山市科学文化センター研究報告第6号, 85-91 (1984).
- 11) 「明治39年度明治40年度石川県水産試験場業務報告(氷蔵魚運搬試験)―石川県水産試験場明治42年刊」, (珠洲市史編さん専門委員会編集, 「珠洲市史 第5巻=資料編 近・現代」, 北国新聞社制作, p.593-596, (昭和54年)に載録)。
- 12) 注: 奥能登とは, 図2の輪島, 穴水, 宇出津, 飯田を含む地域を指す。
- 13) 金沢市統計書, 国会図書館の電子図書ライブラリで大正期の冊子が閲覧できる。